

日语终助词承接形的结合方式与 意义功能的相关性考察

日本語の終助詞承接形の結合方式と意味機能の
相関性について

谭 峥 著 ■

日语终助词承接形的结合方式与 意义功能的相关性考察

日本語の終助詞承接形の結合方式と意味機能の
相関性について

谭 峥 著 ■

外语教学与研究出版社
FOREIGN LANGUAGE TEACHING AND RESEARCH PRESS

北京
BEIJING

图书在版编目 (CIP) 数据

日语终助词承接形的结合方式与意义功能的相关性考察: 日文 / 谭峥著. — 北京: 外语教学与研究出版社, 2015.7

(北理工外语学术文库)

ISBN 978-7-5135-6291-1

I. ①日… II. ①谭… III. ①日语—助词—研究—日文 IV. ①H364.2

中国版本图书馆 CIP 数据核字 (2015) 第 165035 号

出版人 蔡剑峰

项目负责 孔乃卓

责任编辑 赵东岳

封面设计 郭子

出版发行 外语教学与研究出版社

社址 北京市西三环北路 19 号 (100089)

网址 <http://www.fltrp.com>

印刷 北京九州迅驰传媒文化有限公司

开本 650×980 1/16

印张 16

版次 2015 年 7 月第 1 版 2015 年 7 月第 1 次印刷

书号 ISBN 978-7-5135-6291-1

定价 52.90 元

购书咨询: (010) 88819929 电子邮箱: club@fltrp.com

外研书店: <http://www.fltrpstore.com>

凡印刷、装订质量问题, 请联系我社印制部

联系电话: (010) 61207896 电子邮箱: zhijian@fltrp.com

凡侵权、盗版书籍线索, 请联系我社法律事务部

举报电话: (010) 88817519 电子邮箱: banquan@fltrp.com

法律顾问: 立方律师事务所 刘旭东律师

中咨律师事务所 殷斌律师

物料号: 262910001

北理工外语学术文库

主编：李京廉 副主编：姜爱红

编委会

主任：王克非 北京外国语大学

委员（按拼音顺序）：

曹大峰 北京日本学研究中心

陈大明 北京理工大学

程朝翔 北京大学

姜爱红 北京理工大学

李京廉 北京理工大学

刘文杰 北京理工大学

罗选民 清华大学

苗兴伟 北京师范大学

钱敏汝 北京外国语大学

王玉雯 北京理工大学

叶云屏 北京理工大学

郑书九 北京外国语大学

总 序

百年大计，教育为本；国家兴旺，人才为基。如何担负起培养国家栋梁之才的责任，是大学和高校教师必须认真思考和回答的问题。19 世纪下半叶，德国著名学者、教育改革家威廉·冯·洪堡（Wilhelm von Humboldt）提出现代大学的两个重要使命：教学和科研。虽然 20 世纪以后大学又增添了社会服务功能，但教学与科研是大学服务社会的基础和手段。教学是大学满足人们求学深造的愿望以及社会对各种专业人才需求的最主要、最有效的方式。而要将既有知识和学术前沿不断地传授给学生，就需要教师紧跟学科发展趋势，不断更新教学内容，改进教学方法。教师也只有从事科学研究才能保证学术水平不断提高。如果没有一定的学术水平，没有坚实的理论基础和足够的科研积累，则难以胜任大学的教学工作。诚如雅思贝尔斯所言：“最好的研究者才是最优良的教师。只有这样的研究者才能带领人们接触真正的求知过程，乃至科学的精神。”（雅思贝尔斯·《什么是教育》·北京：生活·读书·新知三联书店，1991：152）

正是秉承上述大学精神，我院历来重视学科专业建设，鼓励教师积极从事教学科研工作，努力取得高水平研究成果。《北理工外语学术文库》就是学院教师多年教学实践和科学研究积累结出的硕果，是适应高等教育发展形势，不断提高自身素质，提升教学质量与科研水平的集中体现。

“北理工外语学术文库”包含二十余部学术专著，涉及理论语言学、应用语言学、语言与文化以及文学等外国语言文学研究的主干领域，涵盖英语、德语、日语等不同语种。这些专著既有理论探索，又有实证研

究，既有语言构造、文本、语篇的微观分析，更有思想、文化等宏观研究视角。文库作者多为学院年轻教师，是学院教学科研的中坚力量和未来发展的希望所在。我们相信，“北理工外语学术文库”的出版将提升学院教师的科研积极性，推动学院教学科研再上新台阶。

学术文库的出版得到北京理工大学学科建设经费的资助，得到学校领导和相关职能部门的大力支持，我们对此表示衷心感谢。同时，我们也十分感谢文库编委会在出版谋划、选题和内容审校过程中所付出的辛勤劳动，感谢外语教学与研究出版社同仁的鼎力相助。在文库出版之际，我们真切地期望得到广大读者、同行和专家的关注和指正！

北京理工大学外国语学院

2014年10月28日

序

每次给自己指导过的学生的专著作序，都会感到有一种说不尽的激动，既为学生成才油然而生的衷心的喜悦，又有回味学生成长的无穷的乐趣。

谭峥是我的博士生。2001年她从河北考入北京外国语大学日语系读硕士，于二年级那年作为交换留学生被选派到日本的交流学校——名古屋外国语大学留学一年。那一年里，她学习了一些基础性的语言学知识，并表示要写语言方向的论文。谭峥本人性格开朗、兴趣广泛，我当时很担心她能不能坐下来踏踏实实地做这种枯燥无味的工作，但是，结果出乎我的意料，她完成了一篇关于日语句子结构和终助词方面的不错的论文。也许是硕士时候的研究影响了她吧，在谭峥进入北京理工大学任教五年后，她又回到母校选择我为她的导师攻读博士学位，继续进行有关句子结构和终助词的研究。

句子结构中表达情态的部分，特别是句尾语气部分一直是研究的课题和难点，不仅前期可借鉴的研究成果不多，而且由于牵涉多个层面，在这个方面完成博士论文绝非容易之事。但是，谭峥选择了复合型句子终助词作为自己的研究对象，并决定运用最新理论——语法化进程对终助词进行体系化的实证性研究。谭峥在攻读博士学位阶段曾去日本大东文化大学进修并收集资料，当时我也在那里当客座教授。记得我们多次在研究室、图书馆讨论文，主要是她讲述自己的学习认识并阐述自己的想法，我则从各个方向进行提问以及从宏观的角度帮她整理和推进。后来我回到北京，她继续留在日本一段时间，并在日本的全国学术会议

上宣读了阶段性成果，并投稿发表了论文。我仍然记得她曾经从日本打电话给我哭诉撰写论文遇到了瓶颈，为了准备发表而废寝忘食。我更清楚地记得，她为了精益求精曾两次推迟答辩，以及她由于思劳过度而患上了胃病，至今仍没能痊愈。我为我的学生获得今天的成果感到由衷的高兴，因为，这其中饱含着她全部的努力和艰辛，是令人欣慰和值得骄傲的硕果。

谭峥是一位善于总结、勤于发表的研究者。自完成了博士论文以来，她在两三年间，又连续发表了数篇论文和研究笔记，进一步拓宽和深化了研究，并经常给师弟师妹们提出各种很好的建议。我非常高兴北京理工大学外国语学院能支持青年教师出版专著，这是能迅速提高青年教师研究水平、鼓励他们不断研究的极好的措施。博士论文既是研究的阶段性成果，也是今后进一步研究的起点。常言道，积跬步以至千里，何况谭峥博士论文的完成已是很可贵的一大步。衷心希望专著的出版能为之添火加柴，为谭峥今后的再攀科学高峰奠定坚实的基础。

在科学研究的道路上，行百里者半九十。纵然有好的天赋，若不经千辛万苦的历练和持之以恒的厚积薄发，欲脱颖而出，大抵无望。谭峥是位才思敏捷的青年教师，亦是一位持之以恒的奋斗者。我祝贺她已取得的优异成绩，同时，衷心希望以此次专著出版为契机，在融合各研究领域的相关知识的基础上，以更宽阔的视野深入地探讨问题，这样将不仅能进一步拓宽专著中的亮点，还能使自己的研究跃上更高层次。

在为以谭峥博士论文为基础出版的专著写序时，我有一种感觉，这是意料之中的事，也是情理之中的事，是谭峥学术生涯中的一个里程碑，亦是对我的奖励。

于日平
于北京外国语大学
2014年1月

前 言

语法化不仅体现在内容词向功能词转化的过程中，也可以体现在功能词内部的转化过程中。现代日语中，终助词承接形的构成要素结合方式的变化导致承接形意义和功能的生成及转变，就是其中一例。本书以常用的七个终助词承接形¹为对象，以语法化程度为标准对其进行系统把握，在此基础上分析语法化程度的不同对承接形在句子结构中的地位产生的影响。

本书由以下六章构成。

序章中对本书的研究对象、研究目的、研究立场和方法作概括的说明。然后通过介绍单个终助词和终助词承接现象的有关研究，指出其不足之处，确立本书的着眼点和研究价值。即用动态的视点研究句末“终助词 + 终助词”这类承接形的构成要素和意义功能的形成 / 转变之间的关系。

第一章主要从单个终助词研究和终助词承接研究两个方面分别分析先行研究，指出其不足。在此基础上确定研究对象、研究立场和方法。具体来说就是通过分析现代日语实际例句，找出常用的承接形，并按使用频率排序，然后选取最常用的承接形，动态地且系统地考察其在构成要素的结合方式和意义变化方面的特点。

第二章分三个小节，分别对终助词的三类承接形进行分析。首先对选定的七个承接形从构成要素的结合方式上分为三类，然后从各类的意

1 7个终助词承接形是“かな”“かね”“かよ”“わよ”“わね”“よね”“よな”。

义功能和句中功能上进行分析说明。具体来说,在句中的意义上,“かな”已经具备“思考和信息处理过程中的疑惑”这种“+ α 意义”,属于“融合型”;“かよ”、“わよ”、“わね”依然是构成要素在发挥其原来的功能,没有生成“+ α 意义”,属于“累加型”;“よね”、“よな”、“かね”在一定条件下有时候生成“+ α 意义”,从动态角度看属于“过渡型”。

第三章中导入了语法化理论,对终助词承接形从构成要素的结合方式的语法化程度差异上进行梳理,从而看出其三分类其实是按照语法化程度由低到高的连续排列。本章首先从“复合辞研究”讲起,从语法化理论角度对终助词承接形进行系统化的分类分析,然后阐述其背后的语法化原因,并提出对原因进行解释的新提案。

第四章对含有终助词承接形的句子结构进行了分析。虽然文中因语法化程度的差异而将承接形分成了三类,但其实在特定的上下文中从构成要素的结合方式来看只有“累加型”和“融合型”两种方式。然后弄清句子中在这两种方式下,承接形可与哪种情态(modality)表达一起出现、有何相互制约条件、两种方式对于句子结构的分析有何作用等。特别是在“累加型”方式下,由于构成要素相对独立,所以本章对其要素间的相互承接的规则和限制作了较详细的论述。

终章是对本书的总结并在此基础上提出了今后的课题。基于二项终助词承接形提出的“承接规则”是否对于本书没能展开论述的三项承接形适用、如何适用?本书没有列入研究对象的“ものか”、“のか”、“じゃないか”这种类型的终助词如何研究?本书证明了当代终助词承接形的语法化过程和意义扩张等,但从历时角度来看具体的变化过程还要根据不同时代的发展详细考据才行。这些都是今后的研究课题。

谭峥

2014年1月

前書き

文法化は内容語から機能語への変化に見られるだけではなく、機能語のみの範囲内においても見られると言われている。現代日本語の終助詞承接形は構成要素の結合方式によって承接形の意味機能が形成・変化するというはその一つの例である。本書は日本語における終助詞承接形の意味機能の形成・変化を動的に考察する一研究である。具体的には常用の7つの承接形¹を文法化レベルを基準に体系的に把握したうえで、文法化レベルの相違は承接形の文構造における位置づけに対する影響を明らかにした。

本書六つの章からなっている。

序章では、本研究の研究対象や研究目的、研究立場や研究方法などを説明している。単独の終助詞や終助詞の承接現象など本研究に関係のある先行研究を紹介しながらその貢献と不備を指摘し、本研究の問題点や研究価値などを浮き彫りにする。つまり、文末につく「終助詞＋終助詞」という終助詞承接形における構成要素と意味機能の形成・変化との関係を動的に扱うことにする。

第一章では、単独に用いられる終助詞研究と終助詞承接形研究という二つに分けて、関係のある主な先行研究を取り上げて分析し、構成要素間の結合方式の変化が見落とされているなどの不備や不足を指摘した。そして、それを踏まえた上で、本稿の研究対象を確定し、研究

1 「かな」「かね」「かよ」「わよ」「わね」「よね」「よな」という7つの終助詞承接形である。

立場や方法などを明らかにした。具体的に言えば、現代日本語で実際に使われる実例用法を手がかりにして常用する承接形を見付け出し、使用頻度順に並べてたの承接形を絞りだした。そのうえ、それらについて、体系的にとらえ、承接形の構成方式によって示される機能変化の実態と意味表出の特徴を動的に把握する方針を論じておいた。

第二章は三節に分けて承接形の三タイプを分析を加えた。特定された7つの承接形に関して構成要素の結合方式によって三分類し、そして各類型について意味機能及び構文的特徴を分析・説明を行った。具体的に、意味表出や構文機能の面で、「かな」はすでに「思考や情報処理の過程における疑い」という「+ α 意味」が生じるから「融合型」と、「かよ」「わよ」「わね」は構成要素のもともとの機能の累計で働き、「+ α 意味」が生じないから「加算型」と、そして「よね」「よな」「かね」は条件づきで「+ α 意味」が生じたり生じなかったりするので、それを動的に捉えて「過渡型」とする、ということである。

第三章では、文法化理論を導入して、終助詞承接形に対して、構成要素の結合方式に現われる文法化レベルの差を解明した。それを踏まえて三分類の終助詞承接形は、文法化レベルによって連続的に三段階を呈していることを確認した。具体的に、まず複合辞研究を含め、文法化の視点から終助詞承接形を体系的に把握し、そして承接形に現われる文法化稼動のメカニズムを解明し、最後に終助詞承接形の文法化における独特な稼動要因を提案してみた。

第四章では、終助詞承接形がつく文の構造について分析を試みた。文法化レベルによる承接形の三分類は、特定される文脈においては構成要素の結合方式から言えば「加算的」と「融合的」という両パターンになる。この両パターンのそれぞれの承接形は文において、どのモダリティ類型と接続されやすいか、接続されたモダリティ類型にどんな影響を与えているかを明らかにしたことによって、承接形の結合パターンと文中のモダリティ類型との相互制約条件をはっきりさせた。また両パターンの承接形はそれぞれ、いかにして文構造において働きをするのか、発話モダリティの表現としてどんな役割をしているのかについても論述した。とりわけ「加算的なパターン」の下で、構成要

素がある程度独立しているため、互いに承接する規則や制限について詳しく論じた。

終章では、本研究を締めくくっての結論を示し、関連する問題点を指摘した上で、今後の課題や展望を述べた。二項終助詞承接形研究によって示された承接規則は、本稿で扱わなかった三項またはそれ以上の終助詞承接形の研究に役に立つかどうか、役立つとすれば、どのような点で有効なのかという問題残る。それから今回の研究対象に入らなかった「ものか」「のか」「じゃないか」のような形式は終助詞研究においてどのように扱えばいいのかという終助詞の定義や範囲限定に関わる問題も残り、さらに、終助詞承接形の文法化プロセスや意味拡張を証明したが、それを通時的にどのように進んできているのかなどを、通時的研究を通じて明らかにする必要があるだろう。いずれも今後の研究課題としておく。

目 录

序 章 研究の目的と本書の構成	1
1. 終助詞に関する先行研究の概観	3
1.1 終助詞の定義について	4
1.2 単独の終助詞について	6
1.3 承接する終助詞について	7
1.4 先行研究に対する分析	11
2. 研究目的及び術語の確認	14
2.1 本書の研究目的	14
2.2 関連する術語の確認	15
3. 研究立場と研究対象の絞り	16
3.1 研究立場	16
3.2 研究対象の絞り	17
4. 研究方法	19
5. 構成	20

第一章 先行研究の分析及び研究対象の確立	22
1. 単独の終助詞に関する研究	23
2. 終助詞の承接に関する研究	27
2.1 終助詞の分類・相互承接の研究	27
2.2 終助詞の分類・相互承接に関する先行研究の不備	41

2.3 承接形の個別例に関する先行研究	43
2.4 承接形の個別研究の不備と分析	47
3. 研究対象の確立	49
4. 本章のまとめ	58
第二章 7つの承接形の結合方式と意味機能についての分析	59
第一節 過渡型について——「よね」と「かね」を中心に	61
1. 「よね」について	61
1.1 述べ立て文につく「よね」	62
1.2 働きかけ文につく「よね」の機能	91
1.3 承接形「よな」について	97
2. 承接形「かね」について	100
2.1 「かね」についての先行研究の概観	100
2.2 「かね」の使用実態及び先行研究の分析	103
2.3 「かね」の結合方式・意味機能についての分析	105
2.4 意志・誘い文につく「かね」	108
3. 本節のまとめ——「過渡型」の認定	111
第二節 融合型について——「かな」を中心に	112
1. 問題提起	112
2. 二方向の先行研究の概観との分析	113
2.1 加算的な考え方の先行研究と分析	113
2.2 融合的な考え方の先行研究と分析	116
3. 承接形「かな」のまとめ	121
第三節 加算型について——「かよ」を中心に	122
1. 「かよ」について	122
1.1 問題提起	122
1.2 「かよ」についての先行研究	123

1.3 「かよ」の接続分布と機能分析	128
2. 「わよ」「わね」について	134
3. 本節のまとめ	139
第四節 本章のまとめ	139
第三章 文法化の視点から見る終助詞承接形の意味機能の 形成・変化——「複合辞研究」との関連性を兼ねて	141
1. 終助詞承接形の体系的分析——構成要素の結合方式を 中心に	142
2. 文法化における終助詞承接形の位置づけ	143
2.1 複合辞研究と本書研究の関連性	144
2.2 文法化における終助詞承接形の位置づけ	157
3. 本章のまとめ	179
第四章 文構造における終助詞承接形の位置づけ——構成 要素の結合方式の両パターンを中心に	181
第一節 「加算—融合」パターンから見る承接形の構文的特徴	184
1. 「加算—融合」パターンによる文構造の認定	184
2. 「加算—融合」パターンとモダリティ類型の共起制約	187
第二節 承接形の文構造における位置づけについて	200
1. 文構造における加算的パターン承接形の位置づけ ——終助詞の分類及び承接規則を中心に	201
1.1 「か、わ、よ、ね、な」相互承接の見取り図	201
1.2 意味機能から見る「か、わ、よ、ね、な」の分類	204
1.3 「聞き手との関与度」に基づく承接規則	209
2. 文構造における融合的パターン承接形の位置づけ ——「承接規則」を踏まえて	211

第三節 本章のまとめ及び統計データの付録	217
統計データ	219
終章 のまとめとこれからの課題	224
1. のまとめ	224
2. これからの課題	226
参考文献	228
「用例出典一覧表」	236